

としょかんだより 第84号

2014年8月開館予定表

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | | | 1 | 2 |
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
| 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 31 | | | | | | |

2014年9月開館予定表

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | | | | |

| | | | |
|--|------------|--|-------------|
| | 9:00-21:30 | | 13:00-21:30 |
| | 9:00-17:00 | | 休館日 |
| | 9:00-19:00 | | |

第2回 図書館戸田文化講座 「能の世界」

6月24日(火)に図書館戸田文化講座が開催されました。

講師は本学助教の浜畑圭吾先生です。

能の舞台についてから始まり、能を觀賞する際の注意点など今まで分からなかった「能」について知ることができた講座となりました。



第1回 図書館茶話会-図書館長を囲んで-



7月4日(金)17時より本学裏千家茶道部主催で第1回

図書館
茶話会



が開催されました。図書館に展示された掛け軸や茶道具の説明を聞く傍ら、開催時期に合わせた「七夕」という茶菓子や茶器もギヤマンが使われていて、見た目ですら「涼」を感じられる。茶話会でした。

第3回 図書館戸田文化講座

うたいほん
「謡本を読む-謡い方と所作-」



7月8日(火)図書館戸田文化講座が開催されました。

講師は前回に引き続き本学助教の浜畑圭吾先生でした。

「謡本」とは台本のようなもので謡本を読みながら、迫力のある能の謡や所作を実際に見聞きすることができた貴重な機会となりました。



図書館サービス一時停止のお知らせ

蔵書点検のため図書館を夏期休暇中閉館いたします。期間は8月13日(水)~8月21日(木)

9月1日(月)~9月15日(月)

7月25日(金)より学内者の長期貸出を開始します。

返却期限は9月29日(月)厳守です。

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡

高野町高野山 385

高野山大学図書館閲覧室

TEL : 0736-56-3835

FAX : 0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

文学逍遙 —西行の庵（1）吉野—

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

幼時から大和の国吉野の山河を歩いていた。私の心の風土に吉野があったことは事実である。亡き母の故郷であったため、学校の夏休み、つねに吉野に帰って遊歩しながら自然の美しさに触れていた。とりわけ吉野川六田の淵や瀬で泳いだり戯れていたりを今でも鮮明に覚えている。『万葉集』に「音に聞き目にはまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも」とあるが、飛鳥の都人にとって六田の高名は知られていし、実際に天皇の吉野行脚の途中で見たであろう六田の光景に人々は感動した。

歌聖西行は、吉野に庵を結ぼうとしたのは、単純だが吉野の美しさを存分に知っていたためであろう。その美しさの起因するところは、やはり春を迎えると咲く桜にあったことは否定できない。

なにとなく春になりぬと聞く日より心にかかるみ吉野の山（山家集 1062）

詞書に「春立つ日詠みける」とあるように、西行は春の到来を心待ちしていた。平易な意味だが、西行にとって吉野の山桜は特別なのであろう。このような歌も残されている。

吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき（山家集 66）

桜の花のために身に添わなくなった心の歌であるが、桜に対する猛烈な執着である。ただ西行にとって桜は美的な対象だけではなく、自己の心の中を揺るがすもの、つまり苦悩の対象でもあった。「花見れば



そのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける」（山家集 68）をみると、ある意味で西行は、桜をながめることは自己の内なる心をながめているのである。桜とキャッチボールをしているかのようなのである。有名な『古今集』の在原業平「世の中にたえて桜のなかりせば春のころはのどけからまし」があるが、この「春のころ」と西行の春を迎えるころは共通しているところがある。いうまでもなく、「春のころ」とは、春を迎える人のころであって、いつ咲くのか、またいつ散っていくのであろうか、という平穩ではない心情をいう。



吉野の奥山にひっそりと西行の庵がある。そのなかに何かを見つめる西行の座像が見える。西行は何を見つめているのか、私には明確に理解されないが、私は残り少ない人生を西行自身をながめながら過ごしていきたいと思つた。